

## 2015年度助成事業「地域ホスピス相談支援の実施」報告書

特定非営利活動法人緩和ケアサポートグループ

### はじめに

高齢化やがん患者の増加に伴い、在宅療養支援の充実が課題とされるなか、治療の多様化、死の迎え方の多様化、地域のケア提供資源の不足、家族の介護力の低下などが相俟って、療養者本人と家族の悩みは複雑化している。地域包括ケアシステム構築の推進（厚労省）が打ち出されているが、地域療養を支える訪問看護ステーションでは、日常の訪問看護活動に多くの時間と力をかける必要があり、相談・交流・くつろぎの場の必要性を意識していても、その実践には多くの困難を伴う。

こうした現状を踏まえ、当 NPO 法人は「地域に開かれたホスピス緩和ケア相談等の実施」を目的として、訪問看護ステーションとの協働による「ふらっとカフェ」という取組みを行っている。ステーション内のスペースを用いて、NPO 法人が活動の実際を担うことで、ニーズある人々の居場所や交流の場として機能している。

この活動を基盤として、ステーション内のスペースで定期的に相談支援活動を行うことを構想し、2013 年度日本財団助成事業「地域ホスピス相談室の整備／訪問看護ステーション改修」により、「ふらっと相談室」を開設した。専門的に相談に従事する人員が在室することで、近隣地域住民に対して、在宅ホスピスケアに関する情報提供、治療からホスピス緩和ケアへの移行の相談支援、在宅療養中の患者・家族の困りごとの相談などにあたるのが可能となった。

2013 年 12 月半ばに開室して以来、「ふらっとカフェ」参加をきっかけに相談日に来室するようになった利用者、案内チラシやステーション等からの紹介による利用者が漸増、少しずつ地域に認知されている。

今後も地域の多機関との連携を密にしながら地域療養者のニーズに応え、安心感をもって住み慣れた地域で生活していくことが可能になるように地域ホスピス緩和ケア相談活動を継続していきたい。

### 相談室の利用状況

#### ・利用者数（詳細は別紙一覧表に記載）

2015 年 4 月～2015 年 11 月の期間中、相談室のみの開室は 70 回、ふらっとカフェとしての開室は 7 回であった。相談室のべ利用総数は 260 名（内、カフェ参加者 79 名、電話利用者 16 名であった）。

#### ・相談例（相談室日誌等の記録は相談室に保管管理）

##### 〈がん療養者〉

A さん（2014 年冬にカフェから参加、50 代女性）：

- ・健診で卵巣がんの肺転移が発見された。化学療法を続けながら、がんと共存を願って日常生活を続けている。地域のがんカフェで紹介されてふらっとカフェにも来室された。
- ・カフェにはピアサポートを得る目的や、ご自分の経験を分かち合う姿勢で参加。相談室にも情報授受や語り合う時間を求めて来室されている。カフェや相談室に治療仲間を連れて来られることもある。抗がん剤の変更に当たっては情報収集を相談室でサポートした。
- ・前向きで落ち着いた姿勢に周りの者が励まされる存在である。

B さん（2015 年初夏にカフェから参加、60 代女性）：

- ・乳がん末期で身寄りのない一人暮らしの為、最期をホスピスで迎えたいとの希望があり、地域の開業医の紹介で来室された。「緩和ケア病棟」への入院、アパートの解約、遺品整理、

死後の火葬・納骨などに関する業者との契約をサポートした。

- ・初来室から最期まで、相談室スタッフ皆で寄り添ってサポートできたと考える。

**Cさん** (2015年夏からカフェに参加、60代女性) :

- ・地域のがんカフェから紹介されて来室。
- ・大腸がんの手術後3年経過したが、排便に関する不具合や不安のために外出することが怖いなど、悩みがある。
- ・カフェに同じ疾患の術後の方が参加しているので小グループで悩みを分かち合っって精神的に安定された。

**Dさん** (2012年秋からカフェに参加) :

- ・卵巣がんの手術後の下肢の痺れや身体全体の不調に悩んでいて、外出などの気力がない。
- ・母上の運転サポートで時々来室される。気力が出ないことに罪責感がある。
- ・参加を続けるうちに、同病の参加者と話し合うようになり、カフェ以外でも連絡をし合い励まされるようになった。

〈家族〉

**Eさん** (2015年初夏に相談室に来室、40代男性)

- ・カフェに参加したことのあるケアマネージャーの紹介で来室した。
- ・80代の母上のがん化学療法中の療養を一人で支えていることの悩みを語られた。今後の見通しの不安もあるようで、緩和ケアの可能性や、在宅療養の選択もあることを伝えた。相談担当者に年齢の近い男性がいたことから、語りやすかったようだ。
- ・その後カフェや相談室を適宜利用され、母上の状態が変化し始めた時に相談室で訪問看護の利用を勧めたところ、すぐにケアマネージャーと連絡をとって訪問看護を導入し、在宅緩和ケアを開始された。

〈遺族〉

**Fさん** (2012年2月のカフェから参加、50代女性)

- ・難病の夫が在宅療養中に誤嚥で急死、一人暮らしとなった。
- ・夫の死後3週間くらいの時、駅のポスターとインターネットでふらっとカフェを知って来室された。深い悲嘆の時期にうつ病の診断も受けて服薬治療となったが、カフェ参加者に支えられて過ごした。その後子宮頸がんが発見され、化学療法と放射線療法で縮小、現在病状は安定している。
- ・カフェや相談室にほとんど毎回「誰かと話したくて」来室される。「ここが元気をもらえる居場所になっている」とのこと。少しずつ前向きな言動が増えて、カフェでは、気持ちの沈んでいる参加者への共感と支持的声かけをする役割を担うことが多い。

**Gさん** (初回カフェから参加されていた進行がん女性患者の配偶者、60代男性)

- ・2015年6月に夫人を緩和ケア病棟で看取った。
- ・夫人はカフェや相談室でスタッフとも親交を深めていたことから、相談室の担当者がお悔やみに伺った。
- ・その後Gさんがカフェに参加なさり、手作りの食べ物を差し入れたり、他の出席者と語り合ったりしている。今後、カフェや相談室のボランティアの働きにも参加してくださる可能性がある。

## 活動の成果と課題

カフェ開催日以外の相談室利用者は毎回2から3名、17~24名/月であった。毎回来室する常連利用者が1名おられる。他の方も、ふらっとカフェを契機に利用する場合が多い。療養相

談のみの場ではなく、くつろいで交流できる場として用いられている。利用者にとって、これまで十分に話せなかった思いを時間をかけて傾聴、共感されることが、日々を生きる力になるようだ。

利用件数は当初の計画であった60件／月に及ばなかった。しかし、ステーション、地域の医療機関、ケアマネージャーからの紹介などもあり、地域の諸機関との連携の深まりとともに利用が増える可能性がある。

多岐にわたる相談支援内容に対応可能な相談担当者の育成と確保が引き続き求められている。NPO 法人とステーションの協働開催で諸学習会を開催しているが、さらに内容を深め、事例検討会を開催することも必要と考えている。

幸い、2016年に入ってから、ボランティアで相談担当を希望する看護職の参加があり、今後の活動充実につながることを期待している。

### おわりに

今般の助成により、ステーションとNPO 法人が協働して地域の療養者を支える活動を維持できた。以前から継続してきたカフェ活動が基盤となり、療養の助言を得る場として相談室を利用される方、不安や悩みをおろしてほっとできる居場所として利用される方等、多様な利用者があった。より一層認知され、利用されるように、今後も着実に活動を続けていきたい。



2015年9月12日 ふらっとカフェ(全体で近況報告)



2015年9月12日 ふらっとカフェ(小グループで語り合い)